

ふたつの「武蔵野」

文人の武蔵野

金子光晴（1895～1975年）は、1920年頃に「武蔵野（習作）」という詩を書き、58年に「武蔵野」というエッセーを発表しました。

金子光晴 ⑤

はもちろん自然も風景もいつかは朽ち果てるのだという世界観を武蔵野という場から示しました。

金子はその後、詩集「こがね蟲」で詩人として認められます。新宿・赤城元町の借家住まいだった時に東京女子高等師範の学生で作家志望の森三千代が訪れ、ふたりは24年に結婚します。長男も誕生しますが、長崎の三千代の実家に息子をあずけ、両親は放浪の旅に出ます。32年に帰国しますが、帰国前にはベルギーで協議離婚しています。



金子と森のエッセー集「相棒」。森は金子の妻であり、詩人・作家でもあった（武蔵野市で）

離婚はしたものの、38年に吉祥寺の一軒家に親子3人で住み始めます。44年12月、山中湖畔の中野村に3人で疎開し、翌年敗戦を迎えます。46年3月、一家は吉祥寺の家に戻ります。48年、大川内令子と出会った金子は、53年3月

に令子と結婚。同年12月、金子は令子に無断で協議離婚の届けを出し、その数日後に、三千代との婚姻届を出しています。

「武蔵野（習作）」から30年以上の時を経てエッセー「武蔵野」を発表した頃は、まだまだ女性と女性の間を行き交っていたようです。エッセーでは、武蔵野に住んでいると、四季の移り変わりが心に迫ってきて多感になれると述べています。

なかでも夏から秋にかけては格別で、「恋愛の道ならば、さしずめ、別離を考え、悲しみを耐える時」だそう。そして、「自然」という概念ではなく個別具体的に固有名のついた植物ひとつひとつと

人間との関係に眼差しを向けています。

どちらの「武蔵野」も、自然について記していますが、詩の武蔵野は観念的で、エッセーの武蔵野は実感的です。基本的にはジャンルの違いによるものですが、後者の武蔵野が実感的なのは、 magari なりにも吉祥寺に居を構えて20年が経過して、武蔵野での生活の時間的な蓄積があったことだと思われま

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋 忍）

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。